堀 暁氏の書評論文（オリエント35-2）に応える
Reply to Mr. Hori's Comment on *Tell*
Kashkashok, The Excavations at Tell No. II

カシュカショクⅡ号丘のP9は堅穴住居であっただろうか
——「書評論文」に応える——

Reconsidering the Function of P9 found at
Tell Kashkashok II, Syria

松 谷 敏 雄^{*}
MATSUTANI Toshio

はじめに

1987年と88年の2年間、それぞれ3ヶ月ていどの期間、シリア東北部ハブール平原にあるカシュカショクⅡ号丘⁽¹⁾の発掘調査を筆者らは実施した。その報告書は1991年の春に出版された。この発掘報告書に関して、堀（1992）が本誌においては新しいカテゴリーである「書評論文」という形式のもととりあげ、「内容に関して批判、疑問点を提出し、報告者からの反論を受けたい」（堀1992: 143）と述べた。本稿はそれに応えるもの⁽²⁾の一部である。

1. P9について

報告書を編集しているとき、メンバーのひとりである西秋から、P9は住居址ではないのではないかという強い異論が出されていた。筆者が堅穴住居だと思いこんでいたことと西秋がロンドンへ留学中ということも手伝って、手紙でのやりとりでは十分な議論をつくせないまま、今回は筆者の意見を通させてほしいと、かれを十分納得させる努力をしないで、編集作業を進めたといういきさつがある。このたび、堀（1992）の「書評論文」にいかように対応するかを相談し、分担を決める際に、西秋には異論をぜひ展開してほしいと希望し、まとめられたのが本号の論文（西秋1993: 100）である。

西秋は、P9のようなピットが住居であったか否かについて、4つの側面から論じて

* 東京大学東洋文化研究所教授

Professor, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo

いる。このうち、最後の生態学的検討を除く3点、つまり(1)考古学的分析、(2)歴史的脈絡、(3)民族誌的類推に関してはその主旨が主張されていた。もちろん今回まとめられた論文のように詳細にはわたっていなかったが、当時の手紙(1989年12月4日付)を読みかえてみると、すでに根拠として主張されていた重要な点(たとえば西秋1993:表1、2)の意味を筆者が理解できていなかったことに気付いた。これは筆者には、P9が堅穴住居であったという思いこみがあり、西秋の主張する根拠を偏光フィルターによって遮断してしまったために生じたものと思われる。

今、振りかえてみれば、思いこみは随所にみられる。1例だけ1987年の調査の予報の中から出しておく(松谷1989:8)。

「この層の名称は意図的に「第3層」とかつこをつけて呼ぶことにした。その理由を簡単に述べておきたい。テル・サラサート第Ⅱ号丘やヤリム・テベⅠ号丘の知見によれば、ハッスーナⅠa期の最初の居住は堅穴住居であった。のちになって、土器やその他の文化遺物にはほとんど違いは認められないのに、住居だけが変り、地上にタウフで建造物を築くようになる。おそらく、このテル・カシュカシヨクⅡ号丘においても、そうした変化があったにちがいない。もしそうだとすれば、いいかえれば、第2次調査で地上で築かれた建造物の層位の存在が確認できれば、この層こそ第3層と呼ばれるにふさわしい。そして、堅穴住居は、第4層と呼ばれなければならない。堅穴住居の層を第1次調査において第3層としてしまえば、もし第2次調査で本来の第3層の遺構を確認したとき、変更を余儀なくされる。層位の名称の変更は、発表してしまった後では大層混乱のもとになるし、徹底させることは意外にむづかしい。こうした配慮のもとに、第1次調査においては、堅穴住居の層位を意識的にかつこをつけて「第3層」として発表するわけである。そして、第2次調査で本来の第3層がみつかったとき、第1次調査における「第3層」を第4層に変える方針である。

この時期の文化に初めて遭遇した場合ならばともかく、他の遺跡での知識もあるときには、こうした配慮も理解されるものと考ええる。」

こうした思いこみによって、P9を住居とみなしてしまったのである。西秋によってP9の正しい位置づけがなされた以上、P9を住居址とみることはできなくなった、といわざるをえない。堀の次の指摘はまことは正しいと思う。

「「サラサートⅦ層=半地下式住居」という仮説は、もはや捨て去るべきで、過去の経験にこだわすぎると、実際の姿を見誤ってしまうことになるのではないだろうか」

(堀1992:147)。西秋(1993:111)は、「調査団の公式見解に反する意見を述べることは心苦しいかぎりだが、これもカシュカシヨク調査の一つの成果であると考えていただければ幸いである」というが、決して、心苦しく思う必要はない。筆者も若い頃、先

輩に随分「くいついてきた」が、今は「くいつかれる」立場になったと思わざるをえない。これは研究全体としては進歩している証拠であろう。いずれにせよ、サラサートに参加した堀とカシュカショクに参加した西秋の2人によって、正しい見通しがえられたことはまことによろこばしいというべきであろう。これからもどしどしやってもらいたい。

次に、時期名称については簡単に述べる。筆者自身も、この時期に「適切な」名称が与えられることを望んでいる (Fukai and Matsutani 1981 : 65)。しかしまだ定着しているとはいいがたい。そこで筆者は意図的に「ハッスーナ I a」を用いているにすぎない。この問題は、いずれ時間が解決してくれるものと期待している。

2. 編集者の責任について

堀 (1992 : 153-154) は第1層出土の Seal の比定に触れて、報告書全体の信用が問われると強く指摘している。この件に関しては、千代延が別稿をもって反論する予定であり、その論争の結着をまって、「信用」なり「責任」の所在を明らかにしたいと考える。評者の一方的な見解に立脚しての論法には従えないからである。また評者の比定が誤っているとされた場合には、それなりの弁明をしていただきたいとも思っている。

おわりに

筆者は、発掘とは報告書の刊行をもって終るものと考えてきた。本報告が出ないまま、概報による発掘者の見解を強制されることがいかに多いことか。発掘は破壊である。遺跡の破壊が考古学者に許されるのは、報告書という形で、いかに遺跡を破壊したかを世に公刊する義務を負っているからであろう。報告書を刊行しない発掘は、盗掘者による遺跡の破壊と何ら変る所がない。

堀による「書評論文」が執筆されたのも、報告書の出版が前提となっていることは否定しえないであろう。発掘者は、何らかの仮説をもって遺跡を発掘調査する。その仮説の中には、改めなければならないものもあろう。その上でまた新たな仮説も生じてくる。

こうした考え方をする筆者は、堀の「書評論文」や西秋の本号の論文を大いに歓迎するものである。

注

(1) シリアのハブール平原の遺跡は、シリアの古物当局がたとえひとつの名を与えていても、それらのほとんどはテル群である。カシュカショクの場合も例外ではない。

1985年の夏休みを利用して、発掘するに適した遺跡の選定にでかけた。当時古物当局は、ハブール川の建設されるダムによって水没する遺跡の発掘に全力を注いでい

た。紹介されたのは、ハッサケ市の南に33, 北に6の登録された遺跡であった。筆者ら（松谷と古山）は、これらの遺跡をすべて訪れた。訪れたテルの数は39の数倍におよぶ。選定作業の終了間近かになってみつかったのが、のちにカシュカシヨクⅡ号丘と名付けられることになる遺跡であった。

アレppo博物館のアントワン・スレイマン博士もカシュカシヨクが一番大きいテルを発掘したいと希望していた。そこで、1987年の発掘に先立ち、アレppoで同博士と会い、カシュカシヨクの遺跡にあるテルにそれぞれ番号をつけることにした。ワジの西側に位置する低い円形のをⅠ号丘（これはのちに同博士によって試掘された）、われわれの希望しているものをⅡ号丘、一番大きいものをⅢ号丘、そして今日の村が営まれているものをⅣ号丘とすることに合意した。この結果、われわれの掘るテルの名がカシュカシヨクⅡ号丘と決まったのである。

- (2) 掘の指摘する批判・疑問点は多岐にわたる。ほぼ次のように分けられるとわれわれは考えた。①第4層, 第3層問題。ここには層位の問題とP9が堅穴住居であったのかという問題提起が含まれる。②第2層問題。ここには編年問題がある。③第1層問題。ここでは時期決定の問題が重大である。ついで最後に④編集者の責任問題となる。

本稿でとりあつかうのは、主として①のうちのP9に関してと④についてである。①のうち、層位については、古山が、②と③に関しては、それぞれ担当した小泉と千代延が別稿を寄せる予定となっている。

引用文献

Fukai, S. and Matsutani, T.

1981 *Telul eth Thalathat*, vol. IV, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.

堀 暁

1992 「テル・カシュカシヨク発掘報告書をめぐって」『オリエント』35-2: 143-155

西秋良宏

1993 「北メソポタミア土器新石器時代初頭の堅穴掘削行動」『オリエント』36-2: 100-119

松谷敏雄

1989 「カシュカシヨクⅡ号丘の発掘—1987年—」『東洋文化研究所紀要』第109冊: 1-33

テル・カシュカショク第3, 4層について

——堀 眺氏の書評に応える——

The Layers 3 and 4 of Tell Kashkashok II

古 山 学^{*}
FURUYAMA Manabu

はじめに

堀眺氏が本誌35巻2号に、われわれの発掘報告書に対する批判的な書評を寄稿された。そのことは、議論を深めるという意味で歓迎するものであり、また氏の労を多ししたい。

しかしながら、誤解にもとづいて議論が行なわれた場合には、その議論は生産的なものになり難いと考える。堀氏の批判のなかにそうした誤解ではないかと思われるものがあり、私が担当した層位の問題についても、そのことを強く感じたので、以下に正確な理解が得られるよう述べてみたい。

1. 第3, 4層はどのように区分されたか

まず、堀氏が「上述の記述からすれば、『Level 4 と Level 3 は Bedrock 上面で一致しているが、Layer 4 と Layer 3 は実在し、そこに含まれる遺物は様式的に区別し得る』と主張されているのである。」とカギ括弧をつけて述べている部分である(145頁)。私はそのような主張は一言も述べていないから、これは堀氏の解釈であると判断される。ここでの問題は、Layer 4 と Layer 3 の遺物は「様式的に区別し得る」と堀氏が推測したことである。堀氏がとりあげた報告書の10頁と11頁では、テル・カシュカショクⅡ号丘の層位を記述しているので、ここでは遺物の問題は一切触れずに、層位と遺構との関係だけを述べている。したがって、tauf-walled room を Layer 3, P9 を Layer 4 としたからと云って、私がそれぞれの層に含まれる遺物は様式的に区別されると考えているとみる根拠はないわけで、堀氏のような推測がどうして出てくるのか私にはわからない。堀氏は層を分けた以上、遺物は様式的に区別されている筈だ、あるいは、遺物が様式的に区別されない限り、層を分けてはいけなと云う考え方を持っていて、それを私にあてはめて推測をしたということになるが、どうであろうか。しかしそれは

* 東京大学東洋文化研究所文部技官

Technical Official, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo

堀氏の考え方であって、私は責任を持つわけにはゆかないのである。

土層図は指摘の通り、曖昧なところがあることは否めない。しかし *tauf-walled room* は、その壁や床と *bedrock* との境が遂に把握出来なかったというのが事実である。壁と床に石膏が塗ってあったので、すぐにこれが遺構であると判断出来たのだが、壁と床は *bedrock* と同じ土で作られていたために区分出来なかった。またこの遺構のレベルと、P9 pit-house の掘り込み面との関係も、層位を明確にしなければならないと考え、かなりの時間をかけて追跡をしたのであるが、最下層の層位区分が出来なかった。したがって、その結果として *tauf-walled room* は *bedrock* の上に作られ、P9 は *bedrock* を掘り込んで作られているという関係だけが把握出来たのである。

そこで報告書の記述の通り、こういう関係の場合、一般には同一時期の遺構と考える方が自然であるが、テル・サラサートⅡ号丘で pit house が *tauf-walled construction* の下層から出土していたことを踏まえて、テル・カシュカシヨクの P9 は Layer 4, *tauf-walled room* は Layer 3 であると判断を示したのである。私の判断の根拠はこれだけである。堀氏の云うように「遺物は様式的に区別出来る」と考えたのでもなければ、また「半地下式住居説を補強するものとして第3の説明に飛びついた」(147頁)、つまり「層位によるインダストリーの差を示す」という打製石器の統計処理の結果を、我田引水的に補強のために使おうとしたわけでもない。報告書の記述を素直に読んで批判をしていただければ良いのである。

2. D/8 pit について

また堀氏は注(1)で、私が「郵政考古紀要」Ⅷに書いた論文「ハッスーナⅠa期の集落」を引用して、「Layer 4 と 3 の間で遺物の面では全く違いがないと論じている」から、「D/8 pit を Layer 3 にする根拠は消滅する」。と述べている。そもそも打製石器の統計処理の結果を、P9 が堅穴住居である根拠にしようとしたのではないかというのは、堀氏の推測である。堀氏は憶測にもとづいて、私がこの統計処理の結果に「飛びついたのではないか」としたのである。したがって、私はこのような憶測に責任はない。私ははじめから Layer 3 と 4 の間には、遺物の差がないと考えていたので、そのことを私の論文に書いたのである。

報告書の D/8 pit を記述した部分(17頁と18頁)を読んでみていただきたい。D/8 pit がタウフ壁の土を採った穴であるとしたら、これは Layer 3 に属するし、またこれがP9 と同時期の遺構と考えるなら Layer 4 に属すると述べ、最終的な判断は、この穴を完掘していないことから保留をしているのである。このように、D/8 pit を Layer 3 に決めたわけではないので、堀氏は注(1)で「Layer 3にする根拠は消滅する」と

述べているが、根拠にしていないものが消滅する筈もない。

3. 層位区分をする際の考え方

テル・カシュカシヨクⅡ号丘の第3, 4層を区分する際の私の考え方は、以上述べて来たことから明らかであるが、改めてまとめておく。われわれは、P9の遺構を発掘した時に、その状態からこれを堅穴住居と判断し、テル・サラサートⅡ号丘XV, XVI層の例からこれがタウフ壁を持つ住居よりも先行する可能性が強いことから、P9の層位をLayer 4としたのであった。そのことは報告書に明確に記述してある。堀昉氏は、これが堅穴住居ではないという立場から批判を加えたわけだが、その場合に、第3, 4層を区別する根拠がないことを立証して、堅穴住居説を否定する材料にしようとしたわけである。しかも、私が論拠にしていないことや、考えてもいないことを堀氏の憶測を付け加えてとりあげ、批判をしてみせたのである。堀氏は自分で論拠を作り出してそれを批判してみせ、私が間違っているというのである。これは正しいやり方だろうか。あえて一言云わせて貰うなら、P9は堅穴住居ではないという意見を云う場合、このような無理をして層位の問題をとり上げる必要はなく、堀氏自身の論拠にもとづいてこの遺構の性格を論証してみれば良かったのである。

私は遺跡において層位を分ける場合、常にその理由を明確にしてあり、またその理由を報告書に記述している。あれこれの憶測を加える必要は全くなく、私が提出した理由を理解し、それを批判していただければ幸である。

おわりに

堀氏の書評がきっかけとなり、西秋良宏氏が大変説得的な論文「北メソポタミア土器新石器時代初頭の堅穴掘削行動」を本誌に発表したことは、研究の一步前進と評価出来るもので、やはり議論があってこそこのような成果が得られたのであると、その点を堀氏に感謝している。この西秋論文によってP9の遺構をどう考えるかは、松谷敏雄氏が述べているが、その結果としてP9の層位をどのように決めるかは、自ら明らかであろう。

調査団の公式な見解は松谷氏の文に述べられている通りであるが、私自身は、テル・サラサートⅡ号丘XVI層で出土した穴の中に黒灰が充満し、その直上にタウフ壁の住居が建てられている例から、タウフ壁住居の居住に先立って、それと異なる居住形態があったとする考え方は変っていない。この問題の解決は、当該期の遺構の資料がもっと多く得られることによって解決されるだろうと考えている。

テル・カシュカシヨク出土の封印

——堀氏の批判に答えて——

The Seals from Tell Kashkashok

千代延 恵 正^{*}
CHIYONOBU Yoshimasa

堀眺氏がオリエント35巻2号に書かれた我々の報告書「カシュカシヨク」に関するまことに優れた、また自信にあふれた書評論文を読みその鋭く厳しい研究姿勢と明確な批判に衿を正す思いをいたした次第である。堀氏の批評にはおおいに反省する部分もあるがまた同時に堀氏の一方的な解釈を感ずる部分もあり、ここに改めて堀氏が私の報告部分に対して行なった批判にお応えをすることにした。

堀氏の私の報告に対する批判の第一は第1層の年代の記述が不明確なこと、および報告した土器を安易に Tell Leiran V 層の土器に比定していることである。⁽¹⁾

先ず第1層についてであるがこの層は風雨等の自然的条件、また耕作等による人為的条件による破壊により層全体がひどく荒らされており、報告書にもある如く年代的考察を行なうことは不可能であり、この層についての検討はなされていないのが実情である。⁽²⁾従って我々はこの層の年代については具体的な見解を有していない。第1層の出土資料にはイスラム期も含めて多岐にわたり、しかも出土状況も断片的であり遺構に関しても殆んど不明であった。その点では第1層の遺物、とりわけ土器に関して充分の整理検討された形で報告出来なかったことは我々としても残念なことであった。Tell Leiran V 層の土器に近いとの記述については報告者 Schwarz の記述と我々の資料がほぼ一致すると判断したためであるが、我々が Tell Leiran V 層の土器を実見していない状態で軽々にこのような判断をすることには慎重であるべきであったと堀氏の指摘を心して受けとめたいと考えている。

次に堀氏は第1層出土資料のなかの「封印」の報告で報告者たる私が用語として seal を用いていることに関連して、報告された資料は sealing つまり「封泥」であって seal つまり「印章」ではない。報告者は seal と sealing を取り違えている。報告者のこの

* 東京大学東洋文化研究所文部技官

Technical Official, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo

ような誤認は後述する年代の問題も含めてこの報告書の信頼性を欠くとしている点である。

この堀氏の批判は私にはいささかの外れの気がしている。なぜなら私はこれらの土製品に「ひも」あるいは「縄」の圧痕があることを観察したうえでこれらを「封印」と判断し、それにふさわしい英語として seal を用いたからである。seal という語は英語圏の人たち、また英語を理解する人たちにはこの語で十分に「封印」として通じるからである。そこで、ここでは seal という語について英語一般論として再考し堀氏へのお応えとしたい。

さて、英語の知識のある人であれば衆知のことであるが英語では「印章」・「封印」とともに seal という語を用いるのであり、印章を使う習慣の少ない英米人にとっては seal というのはむしろ「封印」という感覚のほうが強いということを申し上げておく⁽⁴⁾う。

英米人にとって日本語でいうところの「印章」を表現する場合には stamp, stamp seal, flat stamp, seal cylinder 等が用いられ、seal イコール「印章」とはとらえていないのが一般的である。⁽⁵⁾sealing が「封印」の意で用いられる場合もあるがその場合には impression on clay sealing のように熟語として用いられ sealing 単独では堀氏の言う「封印」、ましてや「封泥」の意はないのである。⁽⁶⁾

また同氏は『“seal”ではなく“impression”であって封泥、つまり“sealing”と呼ぶべきである』と記して「impression」イコール「封泥」イコール「sealing」と考えておられるが impression という語は「紙や布、あるいは封ロウに押された印章の印面」のことであり、従って impression の語は印章によってつけられた印面の「図柄」、「文様」、あるいは「文字」そのものを指すものであって「封印」ましてや「封泥」を示すものではない。⁽⁷⁾

堀氏の批判は外国語で文章を書くにあたってはその言語の単語や文を日本語の感覚で恣意的に判断することはかえって誤解を招く危険性があるということをはからずも示しているといえよう。

堀氏の次の批判はこれらの「封印」の年代について報告者が何の根拠も示さずにグレコ・ロマン期のものと報告した点についてであり、堀氏はいくつかの論拠を挙げてジュムデド・ナスル期のものと断定し、我々の報告書に対する不信任を表明していることである。

さて、それでは堀氏が指摘したこれらの「封印」の年代について、先ずワシの「図柄」から考えてみることにしたい。堀氏も書いているようにジュムデド・ナスル期の印

章の印面等に表現されたワシの図は正面を向いて翼を大きくはばたいて飛翔する、そして左右に伸ばした脚で犠牲や動植物をつかむ姿であらわされるのである (Fig. 1~3)。またワシが横向きに表現される場合には犠牲の肉をついばんでいる姿が多く、ワシの体は直立せずに頭を下げて体を水平にしているのである (Fig. 4)。その他にも獲物を狙うかのように体を低くして何かをうかがうような姿で表現されるものもある。また、地上に降り立ち、翼をたたんで周囲を威圧するように直立するワシの姿はジュムデド・ナスル期には認めることができない。さらに構図上でも翼をひろげて飛翔するワシは全て画面の中央部に置かれ (Fig. 1~3)、地上で犠牲をついばむワシは構図全体の中の点景として描かれるのが一般的である (Fig. 4, 5)。

ところでカシュカシヨクの「封印」にみられるワシの図は地上に降りて翼をたたみ背中を伸ばして遠くを見つめて直立した右横向きの姿で表現されている (Fig. 18)。このように地上で翼をたたみ、あるいは半分ほど拡げて周囲を威圧するかのように直立するワシの姿はローマの伝統的な様式であり、その影響の及んだ西アジアの遺跡、例えばドゥラ・ユーロポス、ハトラ、パルミラ等の浮彫りに多くの例が認められる (Fig. 9, 11~14)。また、このようなワシの姿は印章、丸彫りの石像、鋳造による青銅製小像 (Fig. 10) などの例も多い。浮彫りの場合などには横向きのワシのみならず正面向きのものもあり (Fig. 12, 13)、さらにハトラの例の如く神像の背側面コーナー部分に背面よりみたワシの姿をアプリケのように表現したもの等も認められる (Fig. 15)。図像表現上も翼、尾羽、脚等ワシの各部を正確に観察して表出している。さらに構図の上からもこれらのワシが主題のアトリビュートとして表現される場合には方形に作られたフレームの端部にいったいの高さに表現されるか (Fig. 9, 11~13) あるいはコーナー部分に配置されることが多いのである (Fig. 14)。カシュカシヨク出土の封印に表現された右向きに直立するワシの図像は稚拙で多少硬化した表現であるがその姿勢、翼、尾羽、脚等の様式、さらにフレーム端部に高さいっばいに配置する構図等グレコ・ロマン期のものと考えて差支えないのである。むしろ堀氏が紹介したジュムデド・ナスル期の例とカシュカシヨク⁽⁸⁾出土のワシを比較すること自体に無理があると言えよう。

次に人物像の図柄の封印であるが、堀氏の紹介した円筒印章の図柄にもあるようにウルクやジュムデド・ナスル期に印面の人物は労働、儀式あるいは日常生活等何らかの動作をしている場面が大部分であり、しかも身体全体が横向きに表現されているものが圧倒的に多い (Fig. 5~8)。

カシュカシヨクの例は堀氏の言う如く座した人物が仕事をしているという図ではなく、明らかに大きくふくらんだ髪形をした細面の人物が長衣を着用して正面向きに直立している図柄と考えられる (Fig. 19)。このようなポーズの人物像はドゥラ・ユーロポス、

パルミラ、ハトラ等の出土品や壁画、浮彫り等には多くの例があり、表現様式的にもグレコ・ロマン期のものであると考えることが出来る (Fig. 16, 17)。

堀氏がヘビのからまった文様と判断しておられる資料については報告者には全くそのようには判断できなかった (Fig. 20)。ジュムデド・ナスル期のものであるという先入感がヘビの姿を印面にみてしまったのだろうか。

以上述べたような理由でこれらの年代についてはグレコ・ロマン期に属するものであり、これらがジュムデド・ナスル期に属するという堀氏の見解には大なる疑問をいただくものである。

以上ではたして堀氏へのお応えになったか否かいささか心もとないが私の見解を申し述べさせていただいた。またこの機会をお借りして堀氏の深い学識と鋭い観察力、そして学問に対する自信あふれた姿勢には心からの敬意を表させていただくものである。

注

- (1) 堀氏の私の報告に対する批判は第Ⅵ章にあたる部分である。また堀氏の書評論文第3項のタイトルが「3第3層に関して」となっているのは堀氏の校正ミスで「第1層に関して」が正しいと思われる。

T. Matsutani, *Tell Kaskashok, The Excavations at Tell No. II*, 1991 (以下 *Kaskashok* 1991) : Chap. Ⅵ Artifacts from Layer I p. 81 参照

- (2) *Kaskashok* 1991; Chap. I-3 The Stratigraphic Layers of Tell No. II 参照

- (3) T. Iwasaki and J. Kawamura, *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*, 1960 (以下 *Kenkyusha* 1960) によれば Seal には「印, 印形」と「封, 封印」の両方が掲載されている。これは他の英和辞典でも全て同様である。

- (4) C. T. Onions et al (ed.) *The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*, The Third Edition, 1968 (以下 *Oxford* 1968) によれば seal の項目では第1項目に

(A) A device impressed on a piece of wax or other plastic material adhering attached to a documents as a evidence of authenticity or attestation; ...

と説明がなされ、次いで

(B) A token or symbol of a covenant; ...

が説明され、順位としても封印としての seal が優先されている。

また私自身が英語を母語とする英米人(複数人)に対して行なった質問の回答でも全ての人が Seal には「封印」の意を強く感ずるとのことであった。

- (5) L. Legrain, *Ur Excavations*, vol. X, 1951 ではタイトルに Seal Cylinder なる語が用いられているが、これはまさしく「印章」の意である。また同書 Introductory

Note の文中では flat stamp seal という語が「(押捺用の) 印章」の意で用いられている。いずれにせよ『seal という単語は「印章」であって「封印」ではない』というのは堀氏の思いこみ以外の何ものでもない。

- (6) L. Legrain, *Ur Excavation*, vol. X 1951 の Descriptive Catalogue の中で impression on Clay sealing という熟語として用いられている。なおここで重ねて言うが堀氏は impression を「封泥」と考えておられるが impression は押捺印によって印された「文様、図柄」のことであり Clay sealingこそ「封泥」なのである。

seal の動詞としての用法には「印を押す」「～に調印する」という用法があり、

また Seal up 「封をする」という例も存在する。堀氏は sealing を単独に用いて「封印・封泥」としておられるが *Kenkyusha* 1960, Oxford 1968 いずれの辞典でも sealing 単独の意味としては「オットセイ (あるいはアザラシ) 猟」の意しか認められないのである。

- (7) L. Legrain, *Ur Excavation*, vol. III 1936 では Seal-Impressions のタイトルで「印面・図柄」の集成を行なっている。重ねて記すが impression には堀氏の言う「封印」の意味は全く認めることが出来ないのである。

- (8) 堀氏の引用した原典をチェックすることが出来なかったので私の挿図に引用し得なかった。オリエン特誌35-2 (1992) の堀氏の書評論文挿図 3-d (p. 151) を参照されたい。

挿図キャプション

出土地／資料出典

Fig. 1, 円筒印章印影 Ur, Pit W. U. 18413/L. L. Legrain, *Ur Excavations*, vol. III; Archaic Seal-Impressions 1936 (以下 *Ur Excavations* 1936), PL. 11-215

Fig. 2, 円筒印章印影 Ur, Pit W. U. 14769/*Ur Excavations* 1936, PL. 11-217

Fig. 3, 円筒印章印影 Ur, Pit W. U. 18143/*Ur Excavations* 1936, PL. 10-214

Fig. 4, 円筒印章印影 Ur, 出土地点不明 U. 14789/*Ur Excavations* 1936, PL. 14-274

Fig. 5, 円筒印章印影 Ur, Pit D U. 14599/*Ur Excavations* 1963, PL. 16-302

Fig. 6, 円筒印章印影 Uruk=Warka Eanna IV a or b/今井綾子 原歴史時代と初期王朝時代の印章様式の発展——最近の印章研究の諸問題——古代オリエン特博物館紀要 X 1988-89, Fig. 3 P-112

Fig. 7, 円筒印章印影 Ur, 出土地点不明 U. 14662/*Ur Excavations* 1936, PL. 17-330

Fig. 8, 円筒印章印影, Ur. 出土地点不明 U. 14559/*Ur Excavations* 1936, PL. 18-348

Fig. 9, ワシと旗章浮彫, Hatra, イラク博物館蔵/R. Girshman, Iran, *Parthian and*

Sassanian, London, 1962 Fig. 2

- Fig.10, ワシ小像 (青銅製), Dura-Europos, 左. h. 5.7 cm ダマスクス博物館蔵, 右, h. 4.8 cm イェール大学蔵/M. I. Rostovtzeff et al (Ed.), *The Excavations at Dura-Europos conducted by Yale University and the French Academy of Inscriptions and Letters, Preliminary Report of the Ninth Season of Work 1935-1936, Part III The Palace of the Dux Ripae and the Dolicheneum*, Yale Univ. Press 1952 (以下 *Dura Europos*) PL. XXIII-1
- Fig.11, ワシと旗章浮彫, Hatra, イラク博物館蔵 IM 48151/Malcolm A. R. Colledge, *Parthian Art*, London, 1977 Fig. 34
- Fig.12, 建築装飾ワシ浮彫, Palmyra, h.85 cm, パルミラ博物館蔵 1906/6550 / K. Tanabe (Ed.), *Sculptures of Palmyra I; Memoirs of the Ancient Orient Museum*, vol. I, Tokyo 1986 (以下 *Orient Museum* 1986) PL. 84
- Fig.13, 建築装飾ワシ浮彫, Palmyra, h. 24 cm, パルミラ博物館蔵/*Orient Museum* 1986, PL. 86
- Fig.14, 建築装飾ワシ浮彫, Palmyra, h. 89 cm, ダマスクス博物館 No. 16441/*Orient Museum* 1986, PL.123
- Fig.15, アッシュール=ベル神像に附されたワシ浮彫, Hatra, h, 2.0 m (神像高), イラク博物館蔵/深井晋司 世界彫刻美術全集 2 オリエント, 小学館 1976, PL. 125
- Fig.16, 封印印影人物像, Dura Europos, イェール大学蔵/*Dura-Europos, Preliminary Report of the Third Season of Work Nov. 1929-March, 1930*, PL XIII-2
- Fig.17, 線画人物像 (陶片), Assur/R. Ghirshman, *Iran, Parthian and Sassanian*, 1962, Fig. 60
- Fig.18, 封印印影ワシ, Tell Kashkashok/T. Matsutani (Ed.), *Tell Kashkashok, The Excavations at Tell No. II*, Tokyo 1991 (以下 *Kashkashok* 1991) PL. 52-1-b
- Fig.20. 封印印影 Tell Kashkashok/*Kashkashok* 1991 PL. 52-1-c

Fig. 1

Fig. 2

Fig. 3

Fig. 4

Fig. 5

Fig. 6

Fig. 7

Fig. 8

Fig. 9

Fig. 10

Fig. 11

Fig. 12

Fig. 13

Fig. 14

Fig.15

Fig.16

Fig.17

Fig.18

Fig.19

Fig.20

テル・カシュカシヨク第2層の真相

——『書評』に応じて——

The Truth and Re-examination of Layer 2

小 泉 龍 人^{*}
KOIZUMI Tatsundo

はじめに

『オリエント』第35巻—2号(1993)に、堀眈氏(以下評者とする)が「テル・カシュカシヨク発掘報告書をめぐって」という題目で書評を投稿された(以下書評とする)。評者は、冒頭で次のように述べられている:「テル・カシュカシヨク発掘報告書の(途中省略)内容に関して批判,疑問点を提出し,報告者からの反論を受けたいと考えたのである」。批判や疑問点を提示するのは良いことだが,果たしてこの書評は一体どのような論理的手順に導かれているのか?正直な読後感はこのようなものであった。

本稿では,テル・カシュカシヨク遺跡を発掘調査した東洋文化研究所のチームの一員として,また,微力ながらも西アジアにおける先史文化の解明に日々悪戦苦闘している学徒の一人として,書評に対する反論を試みて見ようと思う。実際には,「反論」というよりも「真実の解明」といった方がより正確であろう。つまり,書評には明らかに事実誤認と断定できる箇所が多数見られ,間違った認識に基づく論の展開が窺えるのである。筆者は,この「勘違い」あるいは「誤認」を懇切丁寧に訂正しながら,自身の見解と評者のそれとの相違をはっきりさせていこうと思う。手順としては,まず最初に事実誤認をただし,次に評者と筆者との間にある見解の相違について触れながら,筆者自身の解釈・見通しを紹介してみたい。あくまでも筆者は,何か勘違いで,何が真の問題点なのかをきちんと整理すべく筆を執ったのである。

1. 第2層の概説

テル・カシュカシヨク遺跡第Ⅱ号丘における第2層の簡単な紹介をして見よう。北シリアのハブール川流域に立地するテル・カシュカシヨク遺跡は,1987年と1988年の2シーズンに渡って東京大学東洋文化研究所の調査隊によって発掘された。このⅡ号丘は,主に西側斜面を中心にトレンチ発掘が行われ,調査終了時までには,過去の生活復元が十二分に推測しうる程に発掘面積が広げられて行った。なかでも第2層と命名された堆積

^{*} 早稲田大学文学部助手

Research Associate, Department of Archaeology, Waseda University

層に帰属する墓墳群が発掘区画一面に広がっており、その副葬品から推定してウバイド・「ウルク」期^(注)に該当するものであることが予想された。発掘の際に100以上の墓が発見されたが、このうち副葬品があるか、もしくは構造が明瞭に認識できる63基が登録された (Koizumia 1991 : 59/以下ページ、図版等の番号を記載)。墓の構造は特異な形態を示しており、まず垂直方向に堅穴(シャフト)が掘られてある程度の深さにまで達すると、今度はシャフト底面から水平方向に掘り進められて墓室が形成される。この墓は、ちょうど断面で観察すると地下式横穴とでも言うべきプランを呈している。埋葬後、墓室入口(羨門)に、干しレンガが数段積まれて閉塞されたと想像される(挿図1)。この墓墳形成における独特な方法は、これまで他遺跡ではあまり正確に確認されていないものであり、北メソポタミアのなかでハブール流域に位置している諸遺跡の拡がり(流域圏ないしは地域圏)を検討する上で有効な指標になると考えられる(pp. 62-64)。

ほとんどすべての墓は、プランにおいてある一定のパターンを有している。つまり、必ずと言ってよい程、墓室の北側(東西方向に若干片寄る場合もある)にレンガ列が残存しているのである。この事実から本報告では、一貫して観察される構造上の特徴、埋葬状況、副葬品の種類や配置などについて具体的な事例を用いながら説明し、規則的なパターンの部分的変異、著しい例外などもくまなく記載していった。各事例における具体的なプラン、レンガ列、袖レンガ、枕、頭位、顔の向き、副葬品の種類・配置・推定時期、切り合い関係は、表(Table 9)にまとめた。登録された墓に関する情報はほとんどこの表に包含されており、実測図および写真による情報と併せてカシュカショクのウバイド・「ウルク」墓が復元できるように意図されている。

また、墓出土の副葬品は、筆者独自の器形(フォーム)概念で21フォームに分類した。ここでは、容器端部における立ち上がりの指向性と胴部断面の形状という2つの変数から構成されるフォームを主に設定し、各フォームの形態的特徴や文様表現についての情報を列挙して行った(pp. 67-76)。各サンプルにおける胎土、表面調整、焼成などの観察記録は、巻頭のリストに一覧してみた(List of Plates)。各フォームにおいて比較資料となるような他遺跡における類例を適宜引用した。筆者は、土器編年に関して慎重な姿勢で臨み、後日編年構築する際の便宜を考慮しながら事実記載に徹底した。編年については別稿で詳細に論じているので(Koizumi in press)、本稿では適宜その一部を紹介するに留める。

2. 事実の誤認

では早速、書評で取り上げられている事実関係の真偽について順を追って詳しく吟味してみよう。ここでは書評中の文章を引用し、該当部分における事実関係を究明して行

挿図1 カシュカシヨクの墓

挿図2 カシュカシヨク出土ウバイド・「ウルク」土器

く（挿図 1, 2 参照）。

①「墓には Layer 2a から掘り込まれたものと Layer 2b からのものがあり、層位的に区別される (p. 59)。しかし、参照するようにと指示された Pl. 56 から読み取れるのは……」（書評：148）。

PLs. 56, 82-2; Table 9 の 3 つを参照するようにと指示したのに、なぜか、PL. 56 だけが引用され、T 110・112・116・Tomb just north of T 110 (2a or 2a?)やT 125・129 (2b?) といった、PL. 82-2 および Table 9 に明記された他の墓墳は無視されている。同時に、評者は、T 15, 111 という東西方向のセクション図に載っている墓墳を、南北方向の同図にある墓墳と同格に並べて論じてしまっている。カシュカショクで見つかった墓墳は、上述したように、北側にシャフト、南側に墓室という構造が基本的に採用されている。つまり、その性格上、南北方向の断面では墓室天井部のレベルよりも高い位置にシャフトの掘り込みが残っているので（地表下に同構造の墓墳を造ることを考えれば至極当然であるが）、「墓墳」自体の掘り込み面としてシャフトの掘り込み面をほぼ正確に捉えることができる。一方、東西方向の断面では、墓室天井部あるいはシャフト側面のライン（シャフト残存部における特定レベルでの輪郭）が見える場合が多く、実際のシャフト掘り込み面とは認定し難い。こうした観察結果を踏まえると、墓の掘り込み面として使える情報は、南北方向のセクション図に載っているものに限定されるわけであり、これは Table 9 にすべて盛り込まれている。したがって、評者が墓の特殊な構造を無視し、しかも他の図表における情報を顧みずに論を進めてしまったのは早計であろう。

②「T 18 は J・オーツの言う Terminal Ubaid 期である (p. 62) とされ、その根拠として T 18 に副葬されていた広口の鉢 (Pl. 88-4) がガウラ遺跡 XI-A 層（即ちウルク前期、ないしウバイドーウルク移行期）のもの (Tobler 1950, Pl. CXLI-328) に近いこと (p. 71)、鉢 (Pl. 86-4) が同じガウラ XII 層のもの（同上書 Pl. LXXIX-f）に酷似する (p. 65, Note 1) が指摘されている」（書評：148-49）。

PL. 88-4 (T 18) は報告書の中では特にそれだけで他遺跡出土の類似品と比較されていない。筆者が上述のガウラ XI A 層出土品と比較しているのは PL. 89-4 (T 109) の方である。評者は、T 18 の副葬品の一つとして PL. 88-4 を引用したときに、PL. 89-4 とガウラ出土品の比較の件を勘違いして拾ったようである。この事実誤認に基づいて、T 18 の帰属時期が推測されてしまっている。

③「……副葬された土器の一つ (Pl. 90-5) をハラフ式土器として認定してしまったためであろう (Table 9, Notes) が、胎土やスリップ (xxxii の説明に淡緑色とある)、顔料、焼成などは他の土器と変わらず、ハラフ土器と認定する必然性は極めて薄い」

（書評：149）。

評者は、PL. 90-5 の「胎土」が他の土器と変わらないと指摘しているが、報告書の観察（xxxii）では「灰色胎土 “Gray paste”」と記述されている。副葬品として出土した他の土器は、「赤褐色 “Redish brown paste”」「赤色 “Red paste”」「茶色 “Brown paste”」といった色調の胎土を有するものが主流であり、明らかに「灰色」の胎土とは異なっている。しかも、この特異な色調の胎土をもつ土器は PL. 90-5 一点のみである。これは、他のウバイド・「ウルク」土器と明瞭に区別される。器形・文様の点でもこの土器がハラフ期あるいはウバイドのかなり古い時期に帰属することが言える。アルパチャのハラフ期 “TT 7 or earlier” から、胴部に緩い稜を持ち、頸部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がっていく平底の壺が見つかっており（Mallowan and Rose 1935: Fig. 64-3, 9）、独特の「卵形（橢円形）斑点文 “egg or oval stippling”」が目立って採用されている（Mallowan and Rose 1935: Fig. 64-6, 7, 9, 10）。またソングルAのウバイド墓からは、胴部に稜を有し、頸部から口縁部にかけて外反している壺が出土しており、不規則な大きさの「斑点文」が上胴部に施されている（Kamada and Ohtsu 1991: Fig. 4-P. 5）。したがって、カシュカショク T 3 出土の PL. 90-5 は、北方ウバイド後期よりも同前期初頭あるいはハラフ期終末に比較相当すると考えられよう。

④「また、テル・ブラックの例（Oates 1987a, Fig. 3-10）は大型の赤色磨研土器で全く範疇の異なるもので、比較すること自体が変である」（書評：150）。

筆者は報告書の記述の際に “red burnished ware” と明言しなかったが、PL. 90-8, 9 はまさしくこのブラック（Early Uruk structures）出土の「赤色磨研土器」と同一グループに帰属すると考えられる。その根拠としては、表面の丁寧な磨研調整（fine burnished surface; highly burnished）、植物質の混和材を含む胎土（straw temper; chaff-faced）、褐色あるいは暗茶色から橙色にかけての色調（red or reddish brown paste(slip); pale brown to orange surface）、といった点が挙げられよう（p. xxxii; Oates 1987a: 197）。書評では、PL. 90-8, 9 の表面調整や色調に関する記載項目が見落されてしまっているようだ。また、ハマー V A から “orange or red-slipped burnished pottery” が確認されており（Akkermans 1988b: 312-13）、該当土器が「ウルク」前期に比定されるのはまず間違いなからう。

⑤「筆者にもこの土器の類似例は今のところ指摘できないが、土器の製法や胎土、表面処理が他と異ならず、しかも同じ墓地の同じ様式の墓から出土しているのだから、とりあえずウバイド期相当としておくのが当然ではなからうか」（書評：150）。

ここでは、T 4, 5, 11 から出土した “Jars with short everted necks”（PL. 90-7,

8, 9) が問題とされているが、評者が根拠としている項目を吟味して見ると、報告書に記載されている内容と全く異なることがわかる。まず、これらの土器の製法であるが、PL. 90-7 (T 5) は、内面底部に径 1 cm 位の指頭圧痕が見られ、そこから上方に向かって平行に並ぶ細かい線状痕が過状に延びている (p. 77)。この証拠は、土器製作の段階で「回転台」あるいは「低速ロクロ」が使用された事実を物語っている。カシュカショク出土のウバイド土器は、「輪積み」で成型されるのが主流であるが、中には PL. 90-7 のように成型・整形の工程で「回転台」あるいは「低速ロクロ」が併用されたとされる例がいくつか見つかっている：PLs. 86-9 (T 136), 89-6 (T 109), 14 (T 107)。したがって、これらの土器は、製作技法上他のウバイド土器群と一括されることなく区別されるべきである。

次に、表面処理に関して、PL. 90-8, 9 (T 4, 11) は外面全体に渡って丁寧な「磨研」が施されており、明らかに他の土器群と区別され得る (p. xxxii)。カシュカショク出土品の中で明瞭に磨研と認定できる表面調整を持つものは限られており、PLs. 87-12・90-9 (T 11), 90-8 (T 4), 90-15・91-3 (T 116), 91-8 (T109), 92-9 (T 13) といった程度である (pp. xxix-xxxiv)。ここで注目すべき点は、同一墓墳内に磨研技法が用いられている土器が共伴しているということである (T 11, 116)。特定の墓に特異な技法が集中しているということから、これらの墓や技法が他の墓墳群や土器群とは時期的に区別し得るといえよう。実際に、磨研技法は他遺跡でも特定の時期に目立った存在となっている傾向が窺える。アルパチャのウバイド墓地ではあまり報告例が無いのに対し (Mallowan and Rose 1935: 71-72), ガウラ XI A, XI, X A やハマーム V B といった「ウルク」期 (ウバイド後統期) になると顕著に観察されている (Tobler 1950: 152, 155; Akkermans 1988b: 297)。

さらに、墓の構造について、T 11 では「袖レンガ」“wing bricks”が墓室北側のレンガ列東端に接しており (pp. 60, 62, PL. 79-4, Table 9), レンガ列だけが墓室北側に配置された一般的な形態の墓墳とは明瞭に区別される。「袖レンガ」には、墓室内に位置するものと (T 11, 18, 108, 109, Tomb northern to T 110), シャフト内に位置するものがある (T 25, 102, 110)。主にその副葬品から判断して、前者はウバイド終末期あるいは「ウルク」前期、後者は「ウルク」後期にそれぞれ比定される (p. 62)。T 5 はレンガ列が 3 列となっており、一列あるいは二列に配置されている通常のパターンとは異なる (p. 60, PL. 79-2, Table 9)。他には、T 23 が墓室北側に三列を有しているのが確認されているが、副葬品が見つかっていないので帰属時期に関しては、はっきりとしたことが言えなかった (p. 60, PL. 80-4, Table 9)。T 4 はプランが不明であり、構造上の比較はできなかった (Table 9)。

以上、書評で取り上げられている事項の中には、報告書の記載と異なる箇所や、見落されてしまった部分があり、被評者としてはとても残念であった。

3. 見解の相違

次に、筆者の見解と評者の見解が異なっている部分について検討して見る。

①「カシュカショクでの墓地構造や葬法の解明は、北シリア先史文化研究の基礎となるはずのものである。それにもかかわらず、発掘されたうちのごく少数の墓しか図化されていないのは納得できない」（書評：148）。

墓壙群のデータは、類似した事例から成り立っており、構造・葬法においていくつかのパターンが看取された。そこで、全ての事例を単調に羅列するよりも、観察される上で必要不可欠な傾向をカヴァーしている複数の事例を図化し、全体のデータは表にまとめるという手法を報告者は選択している。図示した資料と表中のデータで全体像が十二分に把握できると信じているし、図化していない資料（ほとんどが類似したデータ）を引きずり出して墓地構造や葬法の解明にどれだけ新たな貢献ができるか疑問である。ただ、事実はできるだけ全て図化すべきであるという視点から見れば、例示数が足りなかったように思う。また、墓壙の時期、副葬品としての土器群の編年に関しては、十分な検討・考察を経た後に、納得のいく説明が行われなければならない。特に編年構築において、安易かつ慎重さに欠ける比較分析は極力排除しなければならないのは当然である。そこで、筆者は、編年「案」を披露してしまうにはまだ早急すぎると思え、極力個人的見解を避けている。

②「しかし、報告者側は十分な情報を持っているはずで、基本的な層位による分類が無意味だった（その場合は層位認定の誤りの可能性を含む）のかどうかも記述されていないのは解せない」（書評：148）。

報告書ではあらかじめ、残存状況がよくないため、墓がどの層から掘り込まれたのかを決めるのは難しいと断わっており（p. 59）、その厳しい状況下で敢えて Layer 2a, 2b から掘り込まれたものを抽出したのである。そこでは、これらの事実を「層位差」あるいは「時期差」の判断基準として積極的に用いるのではなく、「構造」上掘り込み面からどの位の深さを有しているのか、という情報として用いているのである。したがって、報告書では、掘り込みに関しては“Structures”の中で扱っており、単独で「層位」あるいは「編年」といった項目を意図的に設定しなかった。実際に掘り込みがある程度確認された墓はこれこそ全体のごく一部にしか過ぎず（本稿2—①参照）、ほんの一握りの証拠をもってして墓壙群全体の編年を語るのはとても危険である。

③「後者（PL. 86-4）と同形式の土器はハマー・トルクマンの IV-D 層にも出土して

おり (Van Loon ed. 1988, Pl. 93-282), ウバイド後期の範疇外とは言い切れない」(書評: 149)。

ハマーム IV D は、ガウラ XII A, XII あるいはレイラーン VI b の後半と時期並行する (Akkermans 1988: 226-27) という相対編年から、筆者は、PL. 86-4 をウバイド期の終末に位置する“Terminal Ubaid”という時期に帰属させたのである。この時期は、明らかにウバイド後期 (ガウラ XIII, ハマーム IV C, レイラーン VI b 前半) とは区別すべきである。しかし、評者の主張は、ガウラ XII に出土している類似品がハマーム IV D にも見つかっているので、PL. 86-4 はウバイド後期に含まれるという主旨である。このような推測をするからには、評者は従来の相対編年 (ハマーム IV D とガウラ XII が時期並行) とは異なる時期差を想定しているという印象を受けてしまう (でないとしたら、これも単なる勘違いとなってしまうのだが……)。せめてガウラ XII が一体どの時期に位置するのか―「ウバイド後期」に属するのか、あるいは「ウバイドールク移行期」に属するのか―をはっきりとしておいて欲しかった。繰り返すが、筆者はガウラ XII A, XII を“Terminal Ubaid”に時期相当させる編年案に同調している。

④「さらに、同墓出土の Pl. 91-2 の壺に描かれる水滴文がウバイド後期の特色であることは、エリドゥの発掘結果からも明らかであろう (Safar etc. 1981, Pl. 7)」(書評: 149)。

ここでも、T 18 から出土した副葬品を引用しながら、いかにこの墓がウバイド後期に帰属するものであるのかが力説されている。しかし、他の副葬品を眺めると、PL. 86-4 がガウラ XII, ハマーム IV D といった“Terminal Ubaid”出土の事例と類似している。また墓の構造においても、北側のレンガ列西端に「袖レンガ」が接しており (PL. 80-3)、上述のようにウバイド終末期あるいはそれ以降の時期に比定され得る。したがって、T 18 がウバイド後期に帰属するという評者の推定根拠としては、PL. 91-2 の文様である「水滴文」のみしか残ってこなくなり、T 18 をウバイド後期に帰属させる根拠としては不十分である。筆者は、特定のモチーフだけで他地域と安直にクロスデATINGさせてしまうことは控えたいので、現状では T 18 をウバイド終末期に比定させるのが妥当であると考える。

⑤「T 3 etc. は Early Ubaid 期 (p. 63) とされるが、“etc.”が一体何を指すのか理解できない。しかも、T 3 から出土した土器 (PL. 87-10) はエリドゥの Cemetery を特徴付けるもの (Safar etc. 1981, Pl. 7) で、明らかにウバイド 4、つまり北メソポタミアのウバイド後期に属すると思われる」(書評: 149)。

T 3 以外の墓墳からも、他遺跡のウバイド前期“Early Ubaid”層で見つかった土器と類似している「器形 (フォーム)」が比較検討されている。T 24 出土の“Bowl with

sharply incurved, carinated vessel wall” (PL. 86-2) は、サラサート XIV (Fukai, Horiuchi, and Matsutani 1970: PL. 77-6) やレイラーン VI A (Schwartz 1982: Fig. 52-6) といったウバイド前期の資料と類似している (pp. 67-68)。また、“Hemispherical bowls” “Globular jars with rounded bases” などのフォームが、他遺跡のウバイド前期層 (ガウラ XVI・XV, サラサート XIV, アルパチャ “deep levels; main graves”) から出土した土器とそれぞれ比較されている (pp. 69, 72)。ただ、前者においては他の副葬品 (PL. 91-1, 4) がウバイド前期に属するかどうかの比較検討が難しく、後者のフォームでは共伴遺物の比較もさることながら、該当フォーム自体の比定時期に幅があることが予想された (pp. 69, 72)。したがって、ウバイド前期に帰属する墓壇の存在は T3 以外にも予察されたのだけれども、まだ推定できる程に確証が得られなかった。上記の表現を報告書中に用いた言い訳をすればこうなるが、評者の指摘している通り “etc.” という曖昧な表現は不親切であったと反省している。

また、PL. 87-10 の帰属時期についての見解であるが、筆者は “Cup-like vessels” の位置付けを以下のように考えている。このフォームはいわゆる “Bell-shaped bowls” の変形あるいは変異と考えられ、両者の器形上の差異は、器高が口径の4分の3 (口径の半分の1.5倍) 以上あるものは前者、以下のものは後者としている (p. 69)。全体的な印象としては、前者が “tall” で、後者が “squat” である。さらに、後者のフォームには底部直上に水平帯状文が彩色されていることがよくある。この “Bell-shaped bowls” と特定の部位に施される彩文の組み合わせは、アルパチャ “main graves” (Mallowan and Rose 1935: Fig. 29-1, 2, 4) やガウラ XIX-XVII (Tobler 1950: PLs. CXX-83, 87, CXXI-91) に見られ、北方ウバイド前期の前半 (南方ウバイド 3a 期に相当) の指標として用いられることが多い (Oates 1987b: 482; Porada, Hansen, and Dunham 1992: 90)。他方、“Cup-like vessels” は、ウバイド前期後半 (ウバイド 3b) からウバイド後期に集中している (Oates 1987b: 482; Akkermans 1988a: 223)。以上の事実関係より、カシュカショク出土品の推定時期は北方ウバイド前期の後半以降に落ち着くことになる。そして PL. 87-10 は、同一フォームである PL. 87-9, 11 に比べるとやや低めの器高と底部に見られる彩文が上述の「組み合わせ」を想起させ、ウバイド前期後半に帰属する可能性が強くなる。この推測は、T3 出土の他の副葬品である PL. 90-5 の比較分析からも十分に補強され得る。

加えて、PL. 87-10 の「水滴文」はエリドゥにおいて VIII・X 層 (Safar, Mustafa, and Lloyd 1981: Figs. 82-17, 86-17) といった南方ウバイド3期 (北方ウバイド前期相当) 層からも出土しており、必ずしもウバイド4期 (北方ウバイド後期) に限定されていないという事実に着目したい。確かに、「水滴文＝ウバイド4」という捉え方が普

及しているものの、新しい情報を既成の篩にかけるだけで終わらせずに、別の角度から見直す作業にも何らかの価値を見い出せるはずだ。この「器形」あるいは「文様」という視点の相違による解釈のずれは今後慎重に扱うべき問題点であろう。

⑥「T 13 と T 109 から出土した両把手付の土器 (Pl. 91-8, 9, 挿図2-14) は形態、文様とも酷似していると述べる (p. 75) 一方で、Table 9 では前者をウバイド／ウルク期に、後者をウルク期に位置付けており、読者は混乱してしまう。……この形態の土器はハマー・トルクメンでは IV-A, B 期 (Pls. 74, 79), つまりレイラーン VI a 並行期に限定されているのである。」 (書評: 149)。

PL. 91-8, 9 と類似した器形は、確かにハマー IV A・V B (Akkermans 1988a: Figs. 74-95, 79-156), サラサート XIV (Fukai, Horiuchi, and Matsutani 1970: PL. 78-1, 2, 3), ガウラ XVI・XIII (Tobler 1950: PLs. CXXVI-153, CXXX-213) というウバイド前期あるいはウバイド後期から見つかっている。しかし、これらの類似品とカシュカシク出土品の間には大きな差異が観察される。まず、その頸部に付けられたループ状の把手が極めて小さいのが大きな特徴である。他の把手付壺 “Jars with single loop handles” (PL.91-5, 6, 7) の把手に比べても、その差は歴然としている。しかも、前者は残存状況が良好でかつ使用痕が残っておらず (p. 75), 後者は残存状況が悪く明らかに使用されたと思われる。よって、PL. 91-8, 9 の把手は実用性という機能が薄れて行った一種の「退化器官」として捉えられ、他の類似品より遅れた時期に位置付けられるのではなかろうか。次に、頸部が鋭く折り返され気味になっているのも目立つ。他遺跡出土の把手付壺は、これほど角度をつけて折り返されてはいない。このフォーム以外の土器 (Jars with short everted necks) においても、頸部が鋭く折り返される傾向がウバイド前期よりも以降の時期に色濃く現われている (p. 73)。

さらに、類似器形の胎土を調べて見ると、ハマー IV A, B 出土品は植物繊維 “plant temper” を含まず、代りに石灰質の混和材 “lime temper” を多く含んでいる (Akkermans 1988a: 240, 250)。この特徴は、ハマー遺跡における混和材の時期的変遷からも裏付けられていることであるが (Akkermans 1988a: 188-89), カシュカシクにおいては全く異なる様相を呈しており、植物質の混和材 “straw temper” が含まれている。文様について比較して見ても、PL. 91-8, 9 に彩色されている独特なデザイン (三角形の底辺が鋭く内彎して弧を描いている) は、確かにレイラーン IV a 出土品 (Schwartz 1988: Fig. 68-13) とは類似している。しかし、前者は後者に比べての文様の単位が大きく、両端部がかなり細長く伸びている。この文様配置はむしろサラサート X (Egami 1958: Fig. 55-4) で見つかっているような単位の大きいものとの類推が可能で、ウバイド前期に限定されることはないと思われる。

続けて、“Jars with two loop handle”を有する墓壇の帰属時期について検討して見る。PL. 91-8 が副葬された T 109 からは“Deep plate” (PL. 89-4) と“Globular jar with rounded base” (PL. 89-6) が共伴出土している。前者は、同一フォームに属する他の土器と比べてかなり底部が厚い（体部より底部のほうが厚くなっている）という点で、ガウラ XI A 出土の類似品 (Tobler 1950: PL. CXLI-328) と比較されている (p. 71)。また、後者は製作技法上単なる「輪積み」成型ではなく、「回転台」あるいは「低速クロ」を併用した成型であることが観察されている (p. 77)。さらに、墓の構造自体において、「袖レンガ」を墓室内に持つという特異な形態を示している。したがって、T 109 は「ウルク」前期に比定されよう。

他方、PL. 91-9 が見つかっている T 13 からは、磨研が施された小型土器 “Small pottery” (PL. 92-9) が共伴出土している。この土器は、特に他遺跡出土のものと比較されず、帰属時期を特定するのは難しかった。つまり、T 109 には「ウルク」前期に相当すると思われる土器が副葬されており、他方 T 13 には時期決定（「ウルク」前期）に有力な資料がなかった。このことより、T 13 の帰属時期は T 109 に比べてやや古い段階に落ち着けた方が無難であると考え、それぞれ “Ubaid/Uruk” と “Uruk” という表現をした訳である。しかし、本来の器形が “Jars with overhanging rims” と認定されるこの小型土器は、その張出しの弱い鰐状口縁部と稜を持たない球状胴部を考慮して、「ウルク」期に比定される可能性も捨て切れない。というのも、この器形の同一変異を形成している PL. 90-12, 13, 15 が、その表面に磨研あるいはそれに近い調整を受けて光沢を有していることから、「ウルク」期に帰属するかもしれないためである。

⑦「しかし比較された資料のうち、ガウラの土器 (Tobler 1950, Pl. CXLVI-409) は高台を持ち様式が異なる」（書評：149）。

ここでは、「高台」を器形分類における尺度の一つとして捉えるのか、あるいは、底部形態の一変異と解釈するのかで意見の別れるところである。筆者としては、容器の器形を「端部の立ち上がり」と「胴部の形態」という2つの変数を基準にして分類しているので、高台は「底部」のヴァリエーションとして捉えている。したがって、問題となっている “Jars with short everted necks” の分類設定において高台の有無は関係なく、むしろ別の視点（地域圏あるいは流域圏）において解釈している。この「高台」の存在は、カシュカショクの墓壇副葬品あるいはそれに準ずるグループの中には全く見られなかった。ガウラでは XIII 層で初現し、XII 層で普及してくる (Tobler 1950: 140, 146)。ところが、ブラクではウバイド期から後統期にかけての類例が報告されず、初期王朝期の後半になってからようやく高台が目立ってくる (Oates 1986: 260, Fig. 4)。レイラーンにおいてもウバイド期から後統期にかけては高台が僅かに出土しているに過

ぎず (Schwartz 1988: 51, 55, 75), この状況はハマームでも同様である (Akkermans 1988a: 226; 1988b: 310)。チグリス河流域のガウラでは、ウバイド後期からすでに高台が現われたのに対し、他方ハブール川流域のブラク、レイラーン、カシュカシヨク、およびバリーフ川流域のハマームではウバイド・「ウルク」期には高台があまり姿を見せない。つまり、地域圏あるいは流域圏の相違によって、「高台」の出現が頻繁なところと僅少なところに別れるのである。この現象をいかに解釈するかは今後の課題である。

おわりに

以上、『書評』に見られる事実誤認を修正し、見解の相違を指摘しながら筆者自身の見通しを紹介してきた。全体を見渡して見ると、明白な事実誤認に基づいた推測や、思い入れが強く先走った論理展開が散見された。「論理性」とか「客観性」を力説されている評者が、有らぬ「事実関係」の集積から私論を展開されているのは頂けない。特に、「カシュカシヨク出土ウバイド土器の編年試案（書評：挿図2）」なるものを大胆にも提示されているが、よく見ると同一墓墳に含まれる副葬品が評者のいう「ウバイド前期」と「ウバイド後期」にそれぞれ帰属させられている（同挿図2-9: PL. 91-4; 2-13, 15: PLs. 86-2, 91-1）。同一墓墳内に異なる時期の土器が共存している事象に対する説明が見当たらず、最後まで評者の意図はわからなかった。書評における編年案は、こうした意味不明の組列や数々の事実誤認から成り立っているため、その有効性を見出し難かった。

カシュカシヨクにおけるウバイド（「ウルク」）土器編年の構築作業で留意しなければならないのは、資料が副葬品として墓墳から出土しているという状況である。副葬品が故に原位置を保ち、出土量が少なくとも十二分に全体像の復元が可能である。この特異な出土環境を考慮に入れて、筆者は独自の分類・分析に基づいた土器編年を案出した (Koizumi in press)。ここに大まかな概略を簡潔に紹介して見たい。まず、他遺跡の同様なコンテキストのもとで出土した土器をカシュカシヨクと同様に器形分類し、指定された各フォーム内での細かい属性変化を層順（他遺跡）に従って組列させる必要がある。この際、異なるコンテキストで出土した資料も併せて分析する。次に、詳細な観察に基づく属性変化をカシュカシヨク出土の各フォームにおける該当属性と比較する。そして、前者に同調させて後者の属性組列を設定し、属性の集合体としてのフォームの時間的排列を推定するのである。最後に、墓における共存関係と切り合い関係から、属性組列に依拠した編年操作の有効性を検証する。筆者のこういった分析手法は、ウバイド編年研究における諸問題点 (Oates 1987b) を意識したものであり、ある程度有効な手法であると考えている。

最後に、本稿で浮上してきた土器分析に関する課題（上述の問題点も含めて）を以下に整理して見る。①時期推定の際「器形」と「文様」のどちらを優先させるかにより設定時期に若干のずれが生じてくる、②特定の器形あるいは文様は短期間に集中するだけではなく長期間に渡って出現することもある、③「彩文」や「高台」などの形態属性は編年だけでなく「流域圏」あるいは「地域圏」を捉えるのにも有効である、といった点である。唯単に「土器」を比較分析するのではなく、一体何の指標として用いるのか——相対編年における「時期」、分布領域としての「地域圏」あるいは「流域圏」、出土環境（遺構）の性格からみた「機能」——を峻別し、これらの尺度に基づいて「器形」、「文様」、「製作技法」などの属性分析を詳細に進めて行くべきであろう。

注

報告書では、“Ubaid”の後続期として“Uruk”という用語を使った。この意味するところは、“Northern Ubaid Period”（北方ウバイド期）の直後に、南メソポタミアにおけるいわゆるウルク期と時期並行する“post-Ubaid Period”として“Uruk”が位置しているということである。したがって、北メソポタミアの「ウルク」（本稿ではこの表記を採用している）と南メソポタミアのウルクとは内容が必ずしも一致しない。

引用文献

- Akkermans, P. M. M. G.(1988a) “The Period IV Pottery.” In van Loon ed. 1988 : 181-286.
(1988b) “The Period V Pottery.” In van Loon ed. 1988 : 287-349.
Egami, N. (1958) *Telul eth-Thalathat: The Excavation of Tell II, 1956-57*, Vol. I, The Tokyo University Iraq-Iran Archaeological Expedition, Report 1. University of Tokyo.
Fukai, S., K. Horiuchi, and T. Matsutani (1970) *Telul eth-Thalathat: The Excavation of Tell II, The Third Season*, Vol. II, The Tokyo University Iraq-Iran Archaeological Expedition, Report II. The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.
Kamada, H. and T. Ohtsu (1991) “Second Report on the Excavations at Songor A: Ubaid Graves.” *Al-Rāfidān* 12 : 221-48.
Koizumi, T. (1991a) “Construction of Layer 2.” In Matsutani ed. 1991 : 59-65.
(1991b) “Artifacts from Layer 2” In Matsutani ed. 1991 : 67-79.
(in press) “Ubaid Pottery from Kashkashok II: Typology and Chronology.” *Al-Rāfidān* 14.
Loon, M. van ed. (1988) *Hammam et-Turkman I*. Nederlands Historisch-Archeologisch Institut te Istanbul, Istanbul.
Mallowan, M. E. L. and J. C. Rose (1935) “Excavations at Tall Arpachiyah,

1933. " *Iraq* 2: i-xv, 1-178.
- Matsutani, T. ed. (1991) *Tell Kishkashok: the Excavations at Tell No. II.*, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.
- Oates, J. (1986) "Tell Brak: The Uruk/Early Dynastic Sequence." In *Ĝamdat Nasr: Period or Regional Style?*, edited by U. Finkbeiner and W. Röllig, : 245-73. Papers given at a Symposium held in Tübingen, November 1983. Dr. Ludwig Reichert Verlag, Wiesbaden.
- (1987a) "A Note on 'Ubaid and Mitanni Pottery from Tell Brak." *Iraq* 49 : 193-98.
- (1987b) "'Ubaid Chronology." In *Chronologies in the Near East*, edited by O. Aurenche, J. Evin, and F. Hours, : 473-82. BAR International Series 379 (ii). BAR, Oxford.
- Porada, E., D. Hansen, and S. Dunham (1992) "The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600 B. C." In *Chronologies in Old World Archaeology, Third Edition*, edited by R. W. Ehrich, : 77-121. University of Chicago Press.
- Safar, F., M. A. Mustafa, and S. Lloyd (1981) *Eridu*. State Organization of Antiquities and Heritage, Baghdad.
- Schwartz, G. M. (1982) *From Prehistory to History on the Habur Plains: The Operation 1 Ceramic Periodization from Tell Leilan*. Ph. D. dissertation, Yale University.
- Idem* (1988) *A Ceramic Chronology from Tell Leilan: Operation 1*. Yale Tell Leilan Research I, edited by H. Weiss. Yale University Press, New Haven.
- Tobler, A. J. (1950) *Excavations at Tepe Gawra, Level IX-XX*. Vol. II, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.